

博士論文の要約

本論文は、非ワルラス派不均衡モデルが現代のマクロ経済学で果たす役割を理論的に分析するものである。

第1章では不均衡分析の歴史的経緯と特徴をサーベイする。不均衡分析は市場の取引の枠組みでケインズの有効需要原理を表現する理論分析の中で生まれたものであるが、ケインズ解釈にとどまらず、市場取引の記述の再考にもつながる。市場での価格調整の万能性を否定し、かわりに産出・雇用などの数量の調整を重視することで、経済主体の計画していた観念的な需給と実際に取引される数量がしばしば乖離する状況を分析する。これにより、均衡理論には内在していない不整合性という概念が不均衡理論の核にあることが示される。これを用いて不均衡理論を再定義し、この不整合性に各主体が対応することで市場間に暗黙的に働く漏出効果（二重決定仮説）が不均衡理論の数理的枠組みで中心的な役割を果たすことを均衡理論に硬直性を加えたモデルと対比しながら確認する。

第2章では基本的なマクロモデルを提示する。このモデルでは、家計と企業の意味決定が今期に実現する産出に依存する「二重決定効果」が、中長期の経済動学に与える影響を理論的に分析する。モデルの枠組みは既存の Keynes-Wicksell モデルと同じであるが、財・労働市場の不均衡取引を許容し、各時点の取引で市場間の漏出効果が働くことをモデル化する。産出が需要制約的か供給制約的かによって当期の需要・供給・産出を決定するシステムがスイッチするため、モデルの動学には上記のケースごとに質的な違いが発生する。この「二重決定効果」は資本蓄積と実質賃金変動で顕著に働き、需要制約的な局面では財の産出＝需要と投資需要が互いに正のフィードバックを持つことで自律的な需要の多寡が最終的な財需要の規模に大きく影響し、実質賃金調整において財・労働市場の需給の差が緩和されることで調整が鈍り、実質賃金は事後的に硬直的になる。さらに数値計算によって、実質賃金と利子率が低水準であっても自律的な需要が回復しない限りは失業が持続することが示唆される。

第3章では各主体の意味決定をモデル化したミクロ的なモデルを提示する。各主体は価格シグナルに加えて市場での数量制約の可能性（数量シグナル）にも影響を受ける。これにより労働・財の取引に関する1階の条件を二重決定仮説の経路として解釈する。取引量の決定と主体の提示する数量シグナルの決定が分離するため、悲観的な予想が取引中に修正されないことが示唆され、乗数効果の規模が財市場の数量シグナル（予想される需給比）に応じて変化する。また、数量調整過程として既存のマッチングモデルの定常状態を解釈し、アメリカの2000年代以降の失業を摩擦のない不均衡分析での失業と摩擦による失業に分解する。これにより非摩擦・摩擦要因の失業の変動規模がほぼ同じである一方で（不均衡理論に特有の）非摩擦的な失業要因は摩擦的要因と対照的に順循環的であることが示される。この結論は、賃金硬直性および財需要の縮小による失業と労働市場の摩擦による失業が質的に違うものの、景気変動の中では互いに補完しあうように働くことを示唆する。

第4章では在庫変動を取り入れたマクロ動学モデルを提示する。企業は販売制約を知覚し、それをもとに今期の雇用と投資を決定するため、第2章のモデルと違い異時点間の意思決定を含む。一方家計も

所得の流列を今期の所得より予想し消費計画を立てる。上記の知覚された数量制約モデルの動学システムは中期的な在庫循環と長期的な資本蓄積で特徴づけられ、在庫循環は販売制約と在庫調整を通じて定常状態周辺へ安定的に振動しながら収束する一方で資本蓄積率は中期的視点では非常にゆっくりと定常状態から離れる。上記のうち、特に在庫変動は産出が販売数量より大きく変動し在庫がラグを伴って循環的に動くという点で質的な特徴は現実に合致する。ただし量的には変動が過小評価されており、これは企業が最適化問題を解く際に鞍点経路に乗るように雇用・資本を調整しその後漸次的にそれぞれの目標値に調整するという計画に起因する。不均衡理論の枠組みでこれを解決するために、企業が知覚する将来の販売制約が今期の販売とその評価・形成された期待に大きく影響を受けるように今後再定式化する必要があることを確認する。

第5章では本稿の分析を総括する。本稿の不均衡分析では第2章及び第3章に見られるように期内の取引と数量シグナルの再帰性を二重決定仮説として強調した。これは特に価格硬直性でなく数量調整の持つ特質として不完全雇用の分析に適用できるものであるが、第4章でその限界が示された。すなわち、不均衡分析には異時点間にも同様の再帰性が存在することがわかった。これを解決するため、数量制約の知覚の定式化と現実の取引量・将来の期待取引量に関する理論的分析をより進める必要があることを確認する。